

見えない壁の向こう側

三重県 松阪市立嬉野中学校 3年

刀根 蓮 (とね れん)

僕がまだ小学校に入る前、中国の北京にある母の実家で暮らしたことがある。その経験は、人権という言葉の意味を深く考えるきっかけとなった。

それまでの僕は、日本に住む普通の子どもだった。言葉の通じない場所で暮らすのは初めてだった。中国語はまったく聞き取れず、周囲の子どもたちが何を話しているのか全然わからなかった。ただ、そこに見えない壁があるような、僕だけが仲間はずれになっているような気配をずっと感じていた。

ある日、それまで一緒に遊んでくれていた友達が突然僕を避け始めた。近づいてもそっぽを向かれ、遠くから指をさされて笑われたりした。なぜ避けられたのかわからず、胸が張り裂けそうだった。まるで僕だけが世界から切り離されたように感じた。

少し成長してから、その理由を知った。僕があ頃の話をもとにすると、母は静かに語ってくれた。

「あの時、近所に日本人を嫌う子がいたの。昔、日本と中国は戦争をして、多くの中国の人が辛い思いをした。その記憶が今も残り、日本人に良い印象を持たない人もいるの。でも、それは蓮のせいじゃない、悪くないよ。」

それを聞いて僕は胸が苦しくなった。自分が何をしたわけでもないのに、日本人であることだけが理由で嫌われた。それがとても悲しかった。

母は続けて、こう教えてくれた。

「中国では、昔の戦争のことを学校で詳しく学ぶから、日本に対して複雑な思いを持ってしまう人もいるのよ。」

その言葉を聞いて、あの出来事に少しだけ理由を見つけた気がした。けれど、すぐに納得できるわけではなかった。

その後、再び中国を訪れたときのこと。記憶がよみがえり、ふとこんな考えが浮かんだ。

「もしかして中国の人たちは、日本人のことをよく思っていないのかもしれない。」

それでも、母や祖父母をはじめ、家族はみんな僕や父を大切にしてくれていた。だからこそ、そのことがうまく理解できず、心の中は混乱していた。その混乱の中で、相手の気持ちを知ろうとするより、自分を守ろうとして僕は心に壁を作ってしまった。話しかけられても素直に笑えず、目が合うと不安になった。知らないうちに、差別された傷が心に影を落とし、僕もまた中国の人たちを偏った目で見えるようになっていた。

そんな偏見に気づかせ、僕の中にあった見えない壁を取り除いてくれたのは、母の中国人の友人だった。その人はいつも僕に優しく接してくれ、言葉が通じない僕に笑顔で話しかけてくれたり、美味しい料理を作ってくれたりした。ある日、僕は母に聞いた。

「どうしてあの人は、家族でもない日本人の僕にも優しくしてくれるの？」

母は微笑んで言った。

「蓮のことを、日本人とか中国人とかじゃなく、大切な一人の人として見ているからよ。」

その瞬間、自分が抱えていた大きな過ちに気づいた。僕は差別されたことを悔しく感じていたのに、いつの間にか自分も中国人に対して偏見を持ってしまっていた。見えない壁を作っていたのは僕自身だった。差別とは見た目や言葉の違いだけでなく、「どうせ〇〇だから」と決めつけてしまう気持ちの中にこそ存在するのだと気づいた。しかもそれは、自分でも気づかないうちに生まれてしまう。

日本で暮らす今、外国から来た人や異なる文化を持つ人を見ると、あの頃の記憶がよみがえる。友達が「〇〇人ってさ…」と何気なく言ったとき、それは本当に正しいのか。自分もまた、壁を作っていないだろうか。そうやって、心の中で何度も問いかける。

これから先、もし日本語がうまく話せなかったり、周りとなじめずに困っている人がいたら、今度は僕がその人に歩み寄りしたい。かつての自分がしてほしかったように、まずは笑顔で話しかけたい。そして、その人が心から自分はひとりじゃないと思えるよう、寄り添える人になりたい。

誰かの痛みにそっと寄り添うこと。それが人を人として見るということだと、今ならわかる気がする。大切なのは、国籍や言葉ではなく、その人の心を見ようとする姿勢だ。きっとそれが、人権を守る第一歩なのだと思う。僕はこれからも、人との違いを尊重し、どんな国の人とも対等に接する人でありたい。そして、自分が味わった悲しさを、誰にも味わわせたくない。その思いを胸に、心の中の見えない壁を見つめながら、生きていきたい。

見えない壁とは、国と国の間だけでなく、人と人の心の中にもある。けれど、

その向こう側には、理解や共感、友情がきっと待っている。勇気を出して一步踏み出せば、その壁の向こうで助けを求めている誰かに、僕の手が届くはずだから。その瞬間、見えない壁はきっと消えて、光が未来を照らすだろう。